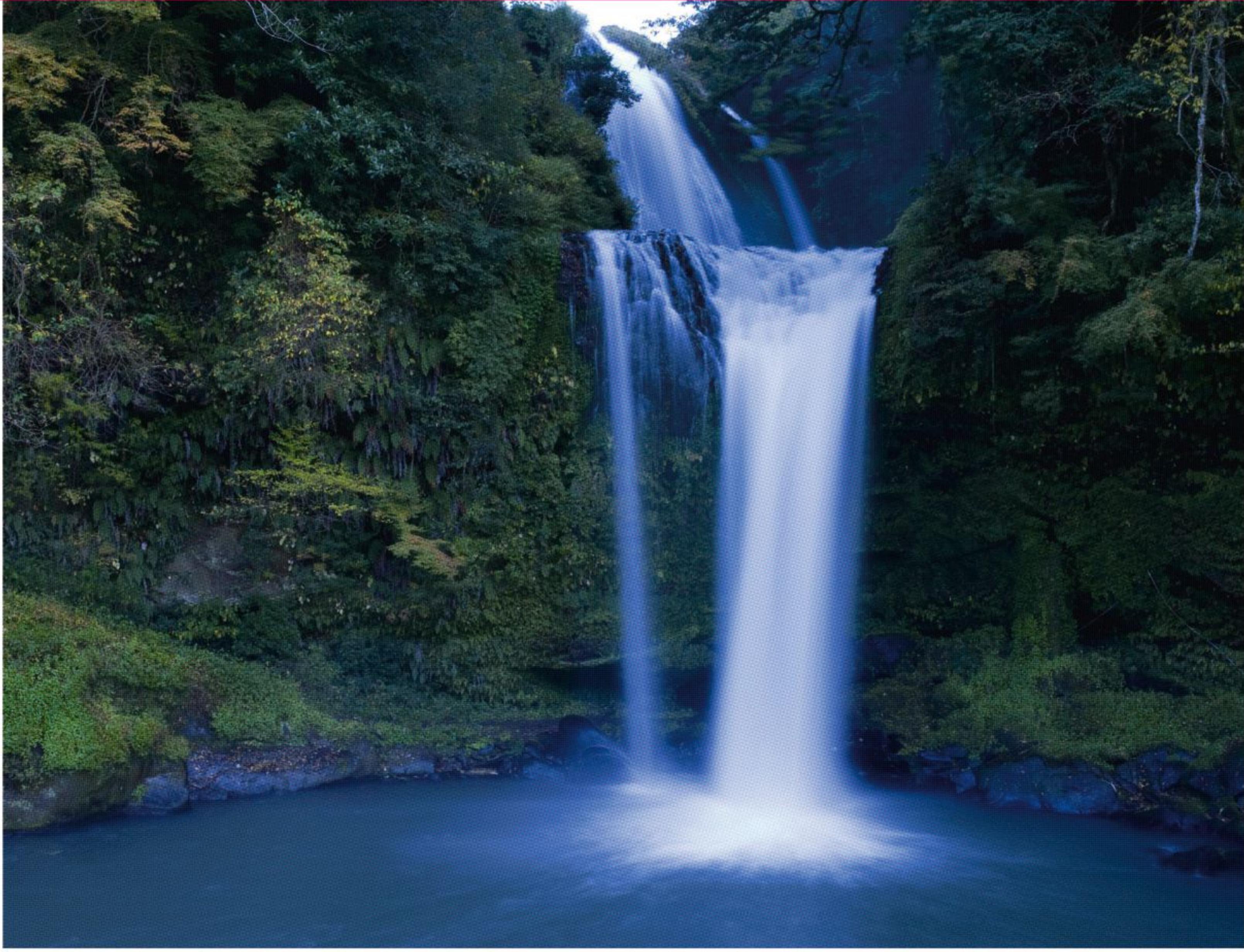




玖珠町

観光 Tourism

童話の里として知られ、旧豊後森機関庫や伐株山など
独特な観光資源に恵まれた玖珠町。近年は工業デザイナーの水戸岡銅治氏によるグランドデザイン事業も注目を集めており、多様な素材をいかにまとめてPRしていくかが鍵になる。観光に携わる若手リーダーたちが、玖珠町観光の課題について語り合った。



る時が来ていると思います。地域の行事を体验させて、子どもたちが「私の出身は玖珠町です」 「玖珠にはこんないいものがあります」と自信を持つ言えるよう育てることが行政の責任だと感じています。子どもたちを町のいろんな観光地に連れていくことも大切でしょう。

独自で着ぐるみを作製

平田 私は20年前に玖珠に帰って、機関庫であった香西かおりさんのジャズライブの手伝いなどをできましたが、なかなか一発ではPRできません。機関庫はいろいろやってきたけど、どうなるか見えない。そこで勝手に別の方向からやってみよう、「エスエライザー」(ファイ)というロボットを作りました。着ぐるみもできたので町外でPRしたい。今、地元のレザー業者に日田杉杉を加工したものでバッグを作ってもらい、売り出そうとしています。玖珠の皮革店と日田の杉材店という全く別の場所にあるものでも、ひらめきによってつながり、新しい商品が生まれます。

村上 ジャズライブなどのイベントもまたやつたらどうでしょう。

平田 繼続していけば広がりができます。でもイベントをやるのは大変で、みんな仕事にひびみが出てしまします。



アドバイザー
JT B九州大分支店
坂本美喜さん

いもあります。地域の各団体、企業、行政がこういう話し合いの場を設けながら一緒にやっていくればいいですね。

坂本 行政と商工会青年部が一緒になってやることはないですか。話を聞いてみると、皆さんやっていることがバラバラな気がして、そこに連帯感を覚えました。

平尾 町の人みんなが知り合いで、個人個人のつながりはすごくある地域だけど、仕事となると絡めない。いいつながりをうまく生かせていないうち。

坂本 もっとベクトルを合わせてやらないといけないと思います。例えば行政が「こういうふうにいきます」と打ち出で、それに商工会青年部や商店街の人を巻き込むとか。

斎藤 平田さんの取り組みを下から応援するのが行政の立場だと思っていますが、坂本さんの意見は持ち帰って、行政として本来やらないといけないことについて話したい。何かするときは大体みんなと一緒にやっているけど、違和感があるといわれるのには何か原因があるんだと思います。いろんな団体が集まる場所を行政が作るべきなのでしょう。